

はしがき

本書は大学の法学部で開講されている「西洋法史」あるいは「西洋法制史」の教科書として書かれました。ですが、同時に、この分野に興味のある方にはどなたにでも是非手に取ってほしいと思います。私たち執筆者は実際に教室で授業をしているような丁寧な語り口で説明することを心がけました。西洋法史という学問の面白さを多くの読者の方々に知ってもらえると幸いです。

法史研究の対象は広範囲にわたります。法制度の歴史はもちろんですが、それが生み出された各国の政治、経済、社会、教育の歴史、さらには国際関係の歴史に触れることもあります。また、過去の法学者、哲学者の体系的な思想や法実務家の実際の見解を取り上げたり、あるいは明確な形では表現されない民衆の法意識に注目したりすることもあります。学者や実務家を含め法律家はその時々の中でのどのような地位にあったかも重要なポイントです。このような法史研究の状況に応じて本書でも法制度、背景となる歴史、様々な思想、法律家・法曹養成など、記述は多方面に及びます。多様な観点から法あるいは法学の歴史を説明していますので、本書を通じて「これは面白い」と思われるポイントをひとつでも多く見つけてもらえれば嬉しいです。

本書ではいくつかの工夫をしました。1つ目は構成です。本書は古代、中世、近世、近代の4部構成ですが、各部のはじめの2講はそれぞれの時代の「通史」の説明にあてています。この部分を読んだけいただければ、西洋法史の全体像を理解することができます。そして、各部の残りの3講は「トピック」として、それぞれの時代で重要と思われる事項をいくつか選んで説明しています。これにより、各講の重要事項について、通史の中での位置づけを考えなが

ら、より深い知識を得ることができます。通史とトピックの学習を通して西洋法史の「広さ」と「深さ」を知って欲しいと思います。

2つ目は史料(邦訳)の掲載です。各講によって取り上げる史料の数や長短に多少の違いはありますが、「ここでは、是非、史料そのものを見てほしい」と思われるところでは史料を取り込みました。私たちが過去の法について知ることができるのは史料を通じてです。近世・近代という比較的新しい時代もちろんですが、特に古代や中世といった古い時代になるほど史料の重要性は高まります。そこに何が、どのように書かれているのか。それは当時どのように解釈されたのか。また後世にどのような影響を与えたのか。こういったことについて史料を見ながら学んでほしいと思います。

その他の工夫としては、各部の冒頭でそれぞれの時代の流れや特徴をまとめ、簡単な年表も掲載しています。また各講には「コラム」を設け、本文には収まりきらなかった話を掲載しています。巻末には「学習に役立つ参考文献」を設け、図書館等でアクセスしやすく、読者の学習の参考になると思われる文献を挙げてあります。もう一步深く学習したい方は是非図書館等で探してみてください。

最後になりましたが、法律文化社編集部の舟木和久氏に心より感謝申し上げます。企画段階から完成まで大変お世話になりました。通史とトピックの二本立てとする構成も舟木さんとの議論の中で生まれてきたものです。また、読者にとっての読みやすさ、わかりやすさを最優先とするという方針についても執筆者一同共感するところでした。他のお仕事も抱える中、編集会議では各草稿に有益なアドバイスをくださいました。本書を無事刊行することができたのはひとえに舟木さんのおかげです。改めて御礼申し上げます。

2024年3月

執筆者一同